

## 選択式問題の解答実践

田辺明生「グローバル市民社会」(早稲田大)

時間  
30分

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

人間の生き方とは、畢竟、ほかの人や生物やモノといかなる関係性をもつかということであろう。そこではまず個人があつて関係をつくるのではなく、まず関係性のネットワークがある。人間主体は関係性のネットワークのなかの結節点としてあり、その自他の関係性に応じて、その主体のあり方も変化する。現代社会の課題には巨視的にみれば、貧困・差別・紛争・暴力といった社会問題と、資源エネルギー問題や地球温暖化といった環境問題の二つがあるが、それらはつきつめればそれぞれ人と人そして人とモノの関係性の問題である。そして、こうした問題を解決するためのよりよき関係性の探究は、社会経済と技術そして政治の問題である。このなかで、個々のセクシュアリティから地球環境までを含み込んだ、グローバルな「関係性の政治」をいかに活気に満ちた効果的なものとするかが問われている。

この問題を検討するにあたって着目すべきは、市民権に、人間の同一性にもとづく平等だけではなく、人間の差異にもとづく多様性をとりいれようとする「差異づけられた市民権」という考え方である。ここで実践的に大切なのは、多様な人びとが差異を相互尊重しつつ、その差異づけを越えてお互いに交渉し、理解し、変容する機会を設けることであろう。つまり真に重要なのは、差異づけられた主体を通じて、他者と出会うことなのである。こうした他者との出会いこそが、差異づけを、権力的統治の道具ではなく、深い多元性を獲得するための社会的資源へと転換するために求められる。

こうした可能性を考えるために、ここでは「方法としての主体」を立ち上げ、「可能性としての他者」に出会うことを提起したい。これこそが現代世界において有意義な「関係性の政治」を可能にする作法であると考えるからである。

現在のポスト・ポストコロナリアル時代に、支配的な市民主体から差異づけられた「異質なるもの」としての位置づけをあえて引き受け、「方法としての主体」を立ち上げることにはどのような意味があるのだろうか。その意義は、ヨーロッパ・都市・ブルジョワ・男性・キリスト教徒を中心とする帝國的・植民地的な支配構造を脱構築し、新たな関係性と主体性を打ち立てることである。ただしこれはあらかじめ定められた目的を達成するための手段ではなく、あくまで、自己が自己のおかれた関係性に働きかけていく開かれた過程であることには注意しなければならない。目的を達成することではなく、自己のあり方そして自他の関係性が生成変化していくことこそが重要である。いいかえれば、「方法としての主体」は、常に自己変容を含んだ運動あるいは過程そのものとしてある。

「異質なるもの」として名指された受動的な位置づけは、自らが選び取ったものではない。しかし、そもそも(ポスト)帝國的・植民地的な状況において、主権的な市民的主体の構築でさえ、人種・階級・ジェンダー・宗教等を通じた非対称的権力関係によって支えられていたのである。現状の支配関係のなかで与えられたカテゴリーをとりあえず引き受け、「方法としての主体」に反転することによって、その立ち位置から、そうしたカテゴリーのおかれた主客の関係性自体に働きかけていくことが可能になる。これは例えば、植民地インドに

において、権力から与えられたカーストや宗教にかかる諸カテゴリーが、「統治される人びとの政治」の基盤となっていたようにである。

ただしその可能性は、チャタジーのいうような「要求の政治」——自らの特殊性にもとづいて国家に政治的要求をすること——にとどまるものではない。主体を「方法として」立ち上げることの意味は、それを権益分配の受け皿とすることではなく、権力主体とその統治の客体という植民地的二項対立のあり方自体を揺るがすことにある。別言すればそれは、非対称的権力関係によって分断された自己と他者の〈あいだ〉に存在する潜在的なオルタナティブの可能性を顕わにしておくことである。それこそが、非対称的権力関係を再生産することなく、本来の意味で他者に出会うことであり、二分法に還元されないような異質性のもつ豊饒さを発見することである。畢竟、権力関係は、外在的なものであるだけでなく、ひとりひとりの主体性そのものに内在的に潜むものである。自らの内なる帝国と植民地主義を揺るがし、自己変容するためにこそ、「方法としての主体」を立ち上げることは必要なのである。

ポスト・ポストコロニアル世界における「方法としての主体」の重要なカテゴリーの一つとして、「方法としてのアジア」は理解できるだろう。近代的理念の実現を全きものとするためには、ヨーロッパがアジア・アフリカに対して一方向的な支配を押し付けるということではだめだ。といって、西洋の侵略に対して、東洋が抵抗するという、従来あったような図式も成り立たない。竹内好は、「西洋をもう一度東洋によって包み直す、逆に西洋自身をこちらから変革する、この文化的な巻返し、あるいは価値の上の巻返しによって普遍性をつくり出す」ことを提言する。いうまでもなく「アジア」は、「ヨーロッパ」の他者として恣意的に切り取られた単位であり、そこに何か実体として独自のものがあるわけではない。しかし、アジアを「方法として」立ち上げたうえで、ヨーロッパを「包み直す」こと、そして「巻き返す」ことは、「ヨーロッパとアジア」という二分法的枠組を崩しつつ、その双方を含みこんだような、より豊饒で普遍的なる新たな関係性の位相に至るうとすることである。そのような意味で、「方法として」のアジアは、同時に自らの「主体形成の過程として」ある。

近代の形成においてヨーロッパが主導的な役割を果たしたとしても、世界的近代はヨーロッパが自律的につくったものではない。近代はグローバルな舞台においてつくられたのであり、それを可能にしたのは異種混濁的な出会いである。ヨーロッパはそうした異種混濁的な過程のなかから、アジアやアフリカを他者化するこ

とによって、主権的主体としての自己を構築したのであった。よって、ヨーロッパとアジアという二項対立的枠組を突き崩し、巻き返すことは、グローバル近代の異種混濁性に内包された潜在的可能性に立ち戻り、そこから新たな主体構築の可能性を輝かしめることである。「方法としてのアジア」の独自性は、それが、支配的な主体から与えられた「異質なるもの」としての客体的位置づけをあえて主体構築の場として引き受けること、そして、そこから自他の関係性自体に働きかけることによって、常に自己変容を含んだ運動あるいは動態そのものとしてあることではなからうか。

\*

こうした自己変容のための「方法としての主体」を立ち上げることは、「ヨーロッパとアジア」という文脈だけではなく、「男性と女性」「エリートとサバルタン」「白人と黒人」などの、さまざまな権力的二分法の解体と主体の再構築において有用であろう。これらの二分法的枠組も、帝國的・植民地的な支配構造と深く結びついたものであることはいうまでもない。

例えば「女性」という「方法としての主体」を立ち上げることは、「女性」というカテゴリーを実体化する

ことではなく、むしろ「女性」という方法によって「男性」を巻き返し、包み直すことで、「男性と女性」というジェンダー・セクシュアリティの枠組そのものを解体し、人間の性的な異種混雑性を十分に認識したうえで、より普遍的な人間理解と、自らの固有性に立った主体構築を可能にすることである。その過程においては、女性というカテゴリー内の多種多様性に目を向けるだけでなく、自他の関係性への働きかけを通じた自己変容が可能となり、「方法としての女性」を通じた自己認識と主体構築はより豊饒化するのである。同じことは、「エリートとサバルタン」という階層的枠組、また「白人と黒人」といった人種的枠組において、「方法としてのサバルタン」や「方法としての黒人」を立ち上げる際にいえる。

こうした「方法としての主体」を立ち上げる際には、「可能性としての他者」<sup>3</sup>に注意深くあらねばならない。自己構築・自己変容の過程は、常に自他の関係性の再編を基盤とするのであり、そのために他者の存在は決定的に重要である。ただ問題は、他者をどのような存在としてみるかである。

西洋の主権的主体を可能にしたのは、自己の反対物として措定された「他者」の存在であったことを前に指摘した。そうした「他者」は、自己ではないものとして否定的に固定化されたものである。それに対して、「可能性としての他者」とは、自己の反対物ではなく、自己もそうであったかもしれない、しかし自己とは異なる、別様の存在者なのである。そうした「他者」は、現存の枠組における主体でも客体でもない。具体的な他者であるより先に、世界における可能なパースペクティブを示すもの、つまり「ひとつの可能世界の表現」なのである。

ここでいうパースペクティブとは、精神に属するものではなく、身体に属するものである。ヴィヴェイロス・デ・カストロが指摘することく、「すべての存在者は、世界を同じ仕方で見ている。変化するのは、それが見ている世界なのである」。ここには、一つの自然をさまざまに異なるように解釈する「多文化主義」ではなく、多様な身体に応じた多様な自然が現れる「多自然主義」がある。「他者」は、自己とは別様の身体——ハビトゥスを構成するある情動の束——をもつ。何を食べ、どこに住み、どのようにコミュニケーションし、何に喜びを感じるかといった情動や指向において、「他者」の身体は特異・固有である。民族、宗教、ジェンダー、セクシュアリティとは、さまざまな身体の違いを表現しようとするカテゴリーである。こうした異なる身体をもつ「他者」の前に現れる世界は別様である。それぞれの身体の経験する情動や感覚、つまり生きる世界が異なるからだ。このような意味で、「他者」は、この世界の潜在的可能性が一つのかたちをとって現れたものなのである。

こうした「他者」に出会うことを通じて、わたしたちは、生の別様の可能性の存在を学ぶことができる。そこにわたしたちの世界はより多元化し、豊饒化する。ただし、こうした「他者」は、自己の有する既存の意味枠組の内部では理解不可能であることに十分に注意しなければならない。わたしたちがなすべきことは、「他者を説明することではなく、わたしたちの世界を多元化することである」。それは、他者を解釈することでも、他者のように思考することでもなく、他者の他者性を尊重しつつ、<sup>4</sup>他者と共に生きようとすることによって可能となる。

(田辺明生「グローバル市民社会」による)

**問1** 傍線部1「多様な人びとが差異を相互尊重しつつ、その差異づけを越えてお互いに交渉し、理解し、変容する機会を設けること」とあるが、その具体的実践例として著者の主張に最も沿うものを次の中から一つ選べ。

イ 人事考課に際して、同等の評価を受けた者が複数いる場合には女性を優先して昇進させる方針を打ち出した会社において、この方針に疑問を抱いた数名の従業員が、この方針の妥当性を問い直すことを通じて両性というジェンダー・セクシュアリティの固定観念そのものを議論する場の設置を会社に要請し、これへの参加を同僚に呼び掛けた。

ロ 西欧近代が創出した人権の理念は、西欧社会の中でもなお確立されているわけではなく、不断に追求されるべき規範性と普遍的妥当力を持つという認識のもとに、学生たちが、アジア世界に属する日本においても西欧との歴史的経路の違いや文化的政治的相違を克服して、人権を尊重し確立する主体を形成すべく、人権NGOを立ち上げた。

ハ 「外国人入店お断り」という注意書きを出している飲食店を目にした地元住民が、人・物・サービスの自由な移動を核とするグローバル市場化の動向と逆行するものとしてこれを問題視し、平等な経済主体同士という「方法としての主体」を立ち上げ、日本人の内なる差別意識の払拭を通じて、自由な市場取引関係を確立すべきだと商店街に訴えた。

ニ 政治的課題の優先度を経済成長に置くか、環境保護に置くかで対立する政治家が、二〇五〇年までに温室効果ガスの排出を全体としてゼロにしないと、その後どのような温暖化対策を講じても手遅れとなる、という科学的知見を共有することにより、政治的立場の差異を尊重しつつもそれを乗り越えて、超党派の気候変動対策連盟を結成した。

ホ 政・官・財界のリーダーとして社会を教導するエリート層が、彼らの社会的地位を資産として次世代へ相続することによりその支配構造を再生産しようとする中で、これに批判的な非エリート層が、自分たちの欲求を分かり易く代弁する政治家を支持することを通じて政治の世界に対立構造を持ち込み、非対称的権力関係を反転させようとした。

**問2**

本文で論じられる「方法としての主体」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ 「異質なものの」として差異づけられた他者と、その差異づけを支えている支配的主体としての自らの位置づけを直視し、自己批判を介することで、豊饒な異質性の一部として自己を肯定しようとする運動・過程。

ロ これまでの歴史のなかで築き上げられてきた非対称的権力関係それ自体に働きかけ脱構築するために、まず自らの異質性を引き受け、それを政治的主張の根拠とすることで主体と客体を反転させるような運動・過程。

ハ 自己の特殊性を、統治者と被統治者の不平等な関係における政治的交渉の資源として活用することで、深い多元性を打ち立てるための新たな主体性を獲得し、より対等な自他関係を切り拓こうとする運動・過程。

ニ 人間の多様性・異質性のもつ豊饒さを発見するため、支配——被支配を前提とした既存の植民地的枠組を放棄し、過去に囚われない新たな自己を発見することで本当の意味での他者に出会うことを模索する運動・過程。

ホ 権力関係は外在的だけでなくひとりひとりの主体性にも内在し得るものであると認識し、その関係を克服するためにその一部をなしている自分自身をまず変え、自他関係の新たな可能性を開こうとする運動・過程。

問3

傍線部2「方法としてのアジア」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

- イ 近代の形成において決定的な要素であったはずの異種混濁性の意義を振り返り、その過程に根差した潜在的可能性に働きかけることで新たな主体構築へと自己を開くためには、支配的主体としての西洋とその客体としての東洋という歴史性を捨て去る必要があるということ。
- ロ 西洋を中心に置く近代的価値観に照らしてアジアは遅れた存在として位置づけられてきたが、そのような与えられた価値に抵抗するのではなく、西洋的価値をも含み込むようなより普遍的な価値の可能性をアジアの歴史に見出すことで世界の認識枠組を刷新し得るということ。
- ハ 近代世界の成立に主要な役割を果たしたのは西洋であり、現代世界の暴力や貧困、差別などの問題は西洋的価値と近代的主体の解体なしにはあり得ない以上、西洋の対比的存在として位置づけられてきた東洋を思考の基盤とすることが二分法的枠組だけでなく西洋自体の変革にも不可欠だということ。
- ニ ひとりひとりの主体性にも織り込まれているヨーロッパ中心の近代史観に基づく権力関係の再生産から自己を解放するには、ヨーロッパの他者というアジアを前提とするのではなく、グローバルな舞台からアジアを捉え直すことでヨーロッパを客体化するという視点の転換が重要な契機となるということ。
- ホ アジアとヨーロッパという区別は実体として非歴史的に存在するのではなく、異種混濁的な出会いを通じてヨーロッパの覇権的地位とともに構築されたものであり、その異種混濁性もつ潜在力を再認識することで、アジアは従来の関係性を覆し全く別の主体を模索するための足場となり得るということ。

問4

傍線部3「可能性としての他者」に注意深くあらねばならない」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

- イ 主権的主体としての自己を支えるために他者を否定性に閉じ込めてしまうのではなく、具体的な他者の情動や指向を尊重しその生に接近することでより直接的な他者理解や共感が可能となるような自己変容に自らを開くことが重要だから。
- ロ 自己のネガティブな側面を他者に転嫁することで自己の優位性を捏造し支配関係を維持するという営みから脱し、他者の視点から自己の世界をいまいちど捉え直すことで自己の情動や感覚を再構成することが重要だから。
- ハ 他者の存在を自己の鏡像とすることで他者を単なる客体の位置に固定してしまうのではなく、特異で固有の身体を持つ他者に出会いその生を追体験する機会を得ることで、世界の多元化の可能性を追求することが重要だから。
- ニ 支配的主体との差異化を通じてあらかじめ固定された枠組のなかで他者を認識することから距離をとる、異なる身体を持ち異なる世界を生きる異質なものと出会いによって、世界の別の在りようを学ぶことが重要だから。
- ホ 自己同一性の根拠とするため他者の存在を自己の反対物として限定し、他者を社会的に抑圧してしまうのではなく、抑圧され不可視化された自己と他者との共通点を具体的に見出すことで、新たな自己関係の可能性を構築することが重要だから。

問5

傍線部4「他者と、共に、生きようとする」とあるが、それはどういうことか、またそれによって何が期待されるか。本文中で区別されている「他者」と「他者」を用いて、一二〇字以上一八〇字以内

